

それでは何を讀むべきか

(No.190 続き)

代表取締役会長 鈴木英介

「爽」秋号(No.190)に「自己啓発本は讀んではいけない」と書いた。そうすると「それでは何を讀んだらいいんだ」と言われると思う。そこで本稿になるのだが、良い本は沢山ある。為になる本も、楽しい本も、人生の視野を広げる本もある。

私は自称乱読家なので、ジャンルの問はず、気の向いた本を讀んでいる。時には2冊を同時に讀んだりする。だから希望によつて様々な本を紹介できるのだが、今回ご紹介する本は、自己啓発本の趣旨と同様、それを讀めば人生の勝ち組になれるという本だ。勝ち方が書いてある本と言ったほうが正確だ。

前に取り上げた2冊「7つの習慣」や「チーズはどこへ消え

た」では具体的に何をどうすれば良いのかは書いていない。そのため、この本を讀んで成功した人の話は聞いたことがない。そこでお勧めするのは「何をどうするか」という事が書かれた本だ。つまり「ノウハウ」だ。

もちろん実際に成功するためには努力も必要だ。運の要素もある。でも方法が解っているのか、解らないのかは大違いだ。試行錯誤をしなくても済む。

その本は2冊。中国の古典「孫子」と宮本武蔵著「五輪書」だ。「孫子」については以前「爽」(No.150「孫子を讀む」)に書いた。だからここでは詳細には触れない。「孫子」は戦争の勝ち方が書いてある本だ。

かつて昭和天皇は、太平洋戦

争の敗戦の原因について、「戦争指導者が孫子の根本原理を体得していなかった」と述べている(昭和天皇独白録)。他の有名人で言えば戦国最強の武将、武田信玄も讀み、その一節を旗印として「風林火山」である。これは孫子のマニュアルに沿って戦争するという宣言だ。

これに対して「五輪書」では一人の人の戦闘での勝ち方が書いてある。

つまりこの2冊をマスターすれば、必勝不敗。必ず勝つという事だ。平和な現代では、事業での成功や、個人の成功に応用できる。そのため多くの著名な経営者も讀んでいる。私の座右の書でもある。

「五輪書」は寛永20年(1643)武蔵60歳の時の書とされている。1643年に数えて60歳なら、1584年頃の生まれだ。関ヶ原の戦いが1600年だから、その時武蔵は満16歳。

冒頭「我、若年の昔より兵法の道に心がけ、十三歳にして初めて勝負をす」その後「六十四度まで勝負すといえども一度もその利を失わず」(64度の勝負に全て勝つた)と言っている。「我到師匠なし」そのため自分がこの道を書き記す。

「それ兵法と言う事、武家の法なり」しかし「今の世に兵法の道わきまえたる武士なし」大方武士の思う心をはかるに、武士は死ぬるといふ道をたしなむ事

と覚ゆるほどの儀なり(潔く死ぬことが武士道だと思ふ者が多い)しかしそんなことは誰にでもできる。百姓でも、僧侶でも死ぬではないか。戦いに勝つ事こそ武士ではないのか。兵法とは戦の役に立つ事。切り合いに勝つことに他ならない。それこそ武士の本分だ。

そこでどのようにして勝つかという事を述べる。

まず「兵法は大工と同じだ」と始める。大将は大工の棟梁に配置する。木は弱い木も強い木もある。それを柱、天井、ねだ、障子等無駄なく配置し、使物にならない木は薪とすべし。「士卒たるものは大工にして、手づからその道具を研ぎ、色々の責め道具をこしらえ、大工の箱に入れて持ち・・・」武器の手入れを自分でできない者、武器を工夫しない者、自分で持たない者、そもそも駄目である。これはどのような仕事に

も通用する事ではないだろうか。

続いて「二刀一流」(二刀流)を説明する。武士は皆二刀を腰に差している。しかしそれを使わず、腰に収めて死ぬものが多い。この二刀を使えば一刀より強いのが道理である。太刀は片手で持つて、片手で使う。脇差は狭いところで使う。「長きにても勝つ、短きにても勝つ」1人で多数相手にするときには特に有効である。実際の戦場では1対1とは限らない。

しかし実際に真剣を持つてみると、片手で持つて使うとなると尋常な話ではない。しかしこれは訓練によりできると断言する。そしてそれは「ただ戦場の道具なるべし」座敷で訓練するものではないとも述べる。

続いて具体的な方法。

「兵法心持の事」どのような心で戦闘に臨むか。「心を広く直ぐにして・・・心は体に連れず、体は心に連れず」心と体が相互

に依存してはいけない。つまり力の不足を精神で補うとか、心が萎えて力を出せないとかを否定する。「我が身のひいきをせざるよう心をもつ事肝要なり」次に「兵法身なりの事」姿勢の事である。顔の位置、目の動き、鼻すじ、あごの位置、首の形、肩の形「兵法の身を常の身とする事肝要なり」常日頃から身体の動きを戦闘の形にする。

次に「兵法の目付という事」状況の見方、目での見方である。「大きに広く付くる目」戦場ではどこから攻撃が行われるか解らない。目を固定せず、広く見る。これは自動車運転でも言われることだ。「遠き所を近く見、近き所を遠く見る」

次に「太刀の持ちようの事」持ち方である。「大指(親指)ひとさしを浮ける心にもち」たけ高指(中指)しめずゆるまず「くすし指(薬指)小指をしむる心にして持つ」ポリッシャー、箒、モップの持ち方も同様である。ポリッシャーなどでは親指

と人差し指に力を入れ過ぎている人が多い。道具を使う作業には大体応用できる。「心」「姿勢」「見方」「持ち方」続いて「足使い」「五つの構え」「太刀の道(太刀筋)」と続いて、「有構無構(うこうむこう)のおしえ」構えあつて構えなし。構えも技も敵を切り、戦闘に勝つためにある。構えにとらわれ、それを忘れてはならない。

道具を使った作業は、様々なものが同じである。武士の刀も、大工の鋸も、私たちのモップも同じだ。また何かを成すための行動と考えれば、武士も大工も清掃人も、同様の心構えが必要である。

武蔵は言う「利を知り、利をわきまえる」

武士の刀は人を切るもの、清掃のモップは汚れを拭き取るもの。「何のためにあるのか」が重要で、これが「利」である。これをわきまえず、形だけをまね、観念論に遊ぶ者は敗者の道を行く者である。